連載　過去の災害を振り返る　第35回

2004年新潟県中越地震の体験談

2004年（平成16年）10月23日（土）の午後５時56分に発生した新潟県中越地震の体験談です。震源地は川口町（現長岡市）で震度７、小千谷市と長岡市で震度６強を観測しました。

水道局　Ａ氏

「災いは忘れたころにやってくる」と申しますが、平成16年10月23日（土）午後５時56分以降、数度にわたる大規模な地震はまさに突然の出来事でした。

わが国は地震国であり新潟県ではかつて新潟地震もありました。地震への備え、危機管理対応はあらゆる組織、個人で平素から当然しておかなければならないことなのですが、心のどこかの油断、隙を見透かしたように、今回、襲ってきました。生活水準の向上とともに、我々は不思議なもので電気、ガス、水、通信などのライフラインはあって当たり前という意識、感覚になっています。

しかし、いざ、震災発生となればライフラインは寸断され、日常あるものが失われ、大変な恐怖感にさらされ、混乱が発生します。今回、水道局では断水により市民の皆さんに大変、ご不便、ご迷惑をおかけしましたが震災発生後、直ちに職員が参集し、情報収集、水源地、配水地などの被害状況把握にあたり、また関係者と連絡を取り、災害復旧への体制を整えました。停電による水源地の取水機能停止、配水池の水位低下、上水道区域の給水停止措置など刻々と変化する非常事態への対応に追われました。

その後、防災協定都市をはじめとする各地から支援が到着する中、水道施設の応急復旧体制、応急給水体制の確立と連日、連夜の作業が続きましたが送、配水ラインの損傷が思ったより少なく、概ね、一週間で水道施設の機能回復ができたのは不幸中の幸いであったと考えています。

水道は市民生活や都市活動を支える根幹であり、日々の生活において「水は蛇口を開ければ出てくるもの」と誰しも考えているわけですが、その機能が失われたとき、その有難さを痛感させられます。水道業務に携わる者として自然災害の脅威、恐ろしさを体験し、如何に日頃からの備えが重要であるかを再認識させられた次第です。

10年前には阪神・淡路大震災があり、行政や防災関係機関は、その経験を将来に活かすべく様々な対応をしてきたところですが、ひとつの災害の教訓がすべての災害に適用できるものではなく、今回の震災においても阪神・淡路大震災とは異なったその災害特性、地域特性、住民特性に応じた細かい配慮、対応が必要なことが実証されたと思います。

いずれにしても「備えあれば憂いなし」であり、今回の災害の教訓を忘れず、災害への不断の備えを進めなければならないと考えています。

病院長　Ｂ氏

平成16年10月23日（土）、その日はどんより曇って寒い日であった。朝から村おこしのイベントがあり、数人の職員とともに出店をだしていたが、あまりの寒さで午後３時ころには引き上げた。

当夜は、村内の有志たちと新任知事の当選祝賀会をひらく予定になっていた。はやく風呂でも入って

出かける用意をしなさいと家内にせかされていた矢先、ドカーンと音がして家がぎしぎし揺れ始め、物が倒れたりコップなどが割れる音とともに暗黒に支配された。家が倒れるかもしれないという恐怖がよぎった。

揺れがおさまるとすぐ懐中電灯を頼りに隣の息子の家へとんだ。暗闇の中、乳飲み子を抱いた嫁が食堂のテーブルの下でふるえて泣いていた。すぐに余震が来た。嫁と孫をかばった。家の中は危険だ、と３人で庭に出た。ときどき余震がきてこの地震はただごとではないと察せられた。嫁と孫は家内にまかせ500メートルほど離れた病院へ自転車で急いだ。あたりは真っ暗で、信号も消えていた。

病棟ではナースステーションは机や書類が散乱し、水道管が破裂し、天井から水が滴り落ち、あたりは水浸しとなっていた中を、決して多くはない夜勤者が手分けをして患者の対応に追われていた。病室もテレビや衣装ケースが横倒しになっていたが、丁度夕食時でほとんどの患者はホールで食事中であり怪我もなく無事であった。

しかし併設している老健施設（100床）では、天井が落ち壁に亀裂が入り、大量の水と蒸気が噴出し危険であった。ここでも皆ホールで食事中だったが、幸い落下物による被害は免れた。

病院より更に少ない夜勤者は半分泣きながら、入所者の世話をしていた。余震が続き徐々に自家発電も消えていく中、すぐに決断し、入所者全員をあるいは車椅子、あるいは背負い廊下続きの本館に避難させた。報道にしばしば登場した近隣の病院と同じく、廊下に直に並べて寝かせた。まさに野戦病院であった。玄関脇に外来を設置し、エンジン発電機による投光で傷病者に対応した。

日付が変わる頃には施設入所者全員の移動が完了し無事が確認された。明るくなって改めてその破壊力に驚嘆した。あちこち傷跡が見つかり、特に老健施設は本館より７～８cm ほど沈下、継ぎめが大きく開いてしまっていた。

幸いにして翌日は日曜日であり、職員総出で移動を余儀なくされた入所者のベッドを本館内のホール、リハビリ室、物置などに運び込み、一応の居室を確保し、その翌25日には通常に近い形で診療を再開することができた。

当夜は大きな混乱で電話も通じない暗闇の中、自宅の被害そっちのけで多くの職員が駆けつけてくれ、有難かった。

この地方は雪こそ多いが地震はなく、地震災害に対するマニュアル等ない状況であったが、日ごろの防火訓練がある程度役に立ったと思われた。

その後の調査で、病院、老健の本体そのものには支障なく、そこそこの修復で使用可であったため、突貫工事で11月半ばには、入所者全員施設へ戻すことができた。

職員、患者らに人的被害がなかったことが何よりであった。今回の災害で多くのことを学んだ。230名からの職員はみなよくやってくれた。中には自宅にかなりの損害を被った者もいる。これら職員たちとまた手を携えて頑張っていこうと誓った。

保育園　C氏

防災講演会（９月３日）で、テーマ『大地震、そのときあなたはどうする、どうなる』の講演を受講した際には、まさか自分が被災者になるとは夢にも思わなかったが、トランジスタラジオと懐中電燈だけは、早速買い求めて携帯していた。それが、役に立つとは…。

10月23日（土）午後５時56分に発生した突然の大地震。恐怖で身体がガタガタ震えました。

先ず、頭に浮かんだのは保育園にいる園児と職員の安否のこと（当日は津南町で開催された研修会に

出席し、地震発生時は自宅で夕食の準備をしていた。)。電話は既に不通で連絡がとれない状態であった。余震で揺れるなかを車で園に向かう。信号の明かりは消え、暗闇のなかを走行している車のライトが不気味に感じられた。保育園は鍵がかかっており、誰もいない様子。ご近所の方や町内在住の職員が地震直後、園に出向いて下さったことを知り、安否の確認ができた時には安堵で身体からスーと力がぬけていくようだった。園周辺は、稲荷神社の鳥居が崩壊し、石垣は崩れ大きな石が道路に転がっていた。

園舎の南面に位置しているプロパン収納ブロック塀は破損し、プロパンも倒れかかっていて危険な状態であった。同行してくれた夫は黙々とプロパンを元の位置に戻し、元栓を閉めて園内外を見廻り帰宅した。

家路に着いた私は、直ぐに食べられそうな物を袋に入れ、毛布を抱えて近くの施設へ避難させていただいた。避難先では、80歳過ぎの義母を気づかいながら頭の中は「これから、私は何をしたらいいのだろう」という思いで一睡もしないうちに夜が明けた。

でも、このような非常事態に毛布で身を包み横になれたことだけでも有難いことだ。施設の職員の方は一寸も休むことなく入居者や避難者を温かく見守り、受け容れて下さったことが身にしみて嬉しかった。

翌日、地震発生時担当職員との連絡がどうしてもとれず気がかりだった職員の自宅を訪ねてみた。丁度、避難先から戻ってきたばかりとのことであり、とにかく、無事であることを涙して喜び合った。保育園の被害状況は、昨年の屋上防水工事のお陰で予想より少ないように思われた。しかし、園庭や園舎付近は危険な状態であり、余震がつづくなかでの保育再開の決断は、身体に童石を載せられたようなほど私には過酷に感じられた。最終的な判断は園が決めなくてはいけないからである。保育再開後は、子ども達の元気な笑顔に救われ、頼もしいスタッフに支えられていた私は、通常保育の目途がたつ頃には悩まされていた身体の揺れと吐き気も治まっていた。

この度の地震では、得るものも多く人と人が共有して生きていくことの素晴らしさ、温かさをこれ程に感じたことはありません。また、全国の皆様から温かなご支援を頂いた事への感謝は生涯、忘れることはないでしょう。今もなお、皆さまのあたたかい励ましとご協力のおかげで充実した保育が日々なされていることに心から感謝しています。そして、今後の避難訓練のあり方等、課題はいくつかありますが、みんなで知恵を出し合い一つ一つクリアしていけたらと思っています。最後に書中ながら、尊い命を犠牲にされました方々へのご冥福と、被災されました方の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

住民　D氏

昔から何度となく聞く言葉「地震・雷・火事・親父」。最初の地震がまさかと思った。その後、未曾有の大地震が、今後忘れる事の出来ない2004.10.23夕暮れ時、始めは来たなと思う位で、まだ腰を据えて早めの夕飯を終わった後、２度目の強震、これは外に出なければと…日頃身近に置く懐中電燈、携帯ラジオを首に掛け屋外へ。近所の住民が広場に集まってくる。その直後３回目の激震が、これで終わりかと思うような激しい揺れ、家全体が上に下に左に右、あっ崩れる唯激然と揺れが収まる迄自分の家の激しい揺れが目に焼き付く中、無我夢中で町内全体がどうか、懐中電燈片手に町内を一廻り。自宅に戻り、今後の一時凌ぎの事をとすでに家内が米、ナベ、コンロその他一週間分の食料をすでに車に積み込んであった。広場に時間とともに防寒着を身につけた住民が集まっている。灯油の油臭、ブロック塀の

破損、電柱のトランスの傾き。地域住民もようやくそれぞれの安全と思われる所に避難し、一夜を迎えようとした。

平成８年に災害時地域別に割り振られた避難場所に全員が集まるよう、消防関係者からの伝言が有り小学校体育館に移動を始める。パニック状態の中、地域消防団員の指示でまだ危険がある中、団員と共にガス栓、電気のブレーカーを切りに廻る。一通り終わって暗闇の中、市街地に車を廻し知人宅の安否の確認に廻ったが、暗闇の中、会うことなく家の状態を見てどこかに避難していると…。この夜は何度となく来る余震、不安の中、朝を迎える。一日二日の食糧不足、上下水道の不備、雪害に強い我が街もかつて経験したことのない大地震に対して無防備。各地から駆けつけたボランティアの方々に頭の下がる思い。

地域連携の大切さ、ライフラインの早期復旧の大切さ、災害から復旧に向かって一歩一歩ゆっくりと急がずぼちぼちやっていこう。

消防団　Ｅ氏

地震が発生した瞬間、何が起きたのかわかりませんでした。２回、３回と強烈な揺れが続き、停電したため、これは大変な地震だと思いました。出動できる服装に着替え、外へ出て半鐘を叩きました。しばらくすると団員も集まり、ポンプ一式をトラックに積み込みました。

その頃、村の人たちは避難を開始していました。村の入口の道路が広くなっているところにひとまず避難することになりました。すでに大勢の人が避難していました。余震が来るたびにその恐怖に震えていたのを覚えています。

区長を先頭に役員、そして消防団などで対策を協議しました。建物の中に入るのはまだ危険と判断し、集会場の前にテントを張ることに決めました。消防団はテントを張る者、まだ避難をしていない方の安否確認をする者に別れ行動を開始しました。その結果、病気や障害などで避難できない人が数人いることが判明しました。テントも完成し、避難してきた人たちはその中に入りました。女性部は炊き出しを開始し、おにぎりが配給されました。

その夜はほとんど眠ることなく、消防団員は活動してくれました。安否確認、ガスの元栓締め、被災状況の確認などに夜を徹して働きました。翌日は明るくなるにつれ被災の程度がわかり、亀裂箇所のシート補修、破損家屋の修理などを行いました。２日目以降も昼夜の警備を怠らず、交替で警戒に当たりました。

今思えば火災が無かった事と降雪前の時季だったことが幸いしたと思いますが、何よりも村の組織と連携を密にして行動した事がよかったと思います。

また以前、災害を想定した防災訓練が鉢地区で行われていたことも円滑な避難に寄与したと思います。今後の課題として災害を想定した訓練を行うことが必要かと思います。その際は雪があった場合、火災も発生した場合などの条件も想定して対処法を学ばなければならないと思います。さらに水、食糧、毛布、テントなどの備えはどうするのかも考えなければならないでしょう。

消防団員は災害の際は大きな力になりますが、災害救助のプロではありません。地域のさまざまな組織と連携して円滑な避難誘導や被害の拡大を防ぐ役割を担わなければならないと感じた今回の災害でした。